

# 内村鑑三における二元論的思想の再考

岩野 祐介

## 序

内村鑑三は聖書を解釈したテキストを中心に、数多くのキリスト教と関係した著作を残しているが、そこにあらわされたキリスト教思想は非常に幅広く多面的である。そのため、ある文章における主張とまた別の文章における主張とを比較したときに、矛盾しているように見えることもある。たとえば、ある文章では日本のキリスト者ということを強く打ち出してナショナリズム的な主張をしながら、別の文章ではキリスト教の普遍性を力説している。他にも、赦しと裁き、Jesus と Japan など、一般的には二者択一的であるとみなされることの両方を、内村は追求しようとしているかのようである。果たして、内村の思想は矛盾しているのか。あるいは、読者に合わせて態度を使い分けているのだろうか。

筆者はこの問題に関して基本的に、矛盾というよりも内村に「神のこと」と「人間のこと」を区別して表現する側面があることによるものであると考えている。たとえば内村は「代表的日本人」等の著作を通して武士道を高く評価している一方で、「武士道と基督教」の中では、「武士道其物に日本国を救ふの能力は無い」<sup>ちから</sup><sup>1</sup>とはっきり述べている。すなわち、人間どうしの倫理として高く評価される武士道にも、人間の靈魂を根本的に救済するものではない、ということになるであろう。

このような内村の表現の仕方に関して、土肥昭夫はそこに「二元論的な思考方法」を見出し、「彼はこの立場に立ったがゆえに峻烈きわまる抵抗と拒絶的態度をもって歴史の動向に対して挑戦していった」一方で、内村が二元論的な立場にとどまる限り、「歴史を生き、歴史の中にあるキリスト者の日本を含めて世界に対する正しい対決の方法や責任ある行動は信仰的にも思想的にも不可能であると言えないだろうか」と批判している。<sup>2</sup>土肥は、内村に限らず日本のプロテスタント・キリスト教全体の

---

1 内村鑑三「武士道と基督教」『内村鑑三全集 22』、161 ページ。(『内村鑑三全集』岩波書店、1980—1984 年。以下『全集』と表記。なお本稿では基本的に『全集』に掲載された通りに引用し、旧字体をそのまま用いた。引用部につけられているルビは、〔 〕に入ったものが『全集』の編集者によるルビであり、そうでないものが『聖書之研究』その他の初出時のルビである)

2 土肥昭夫『内村鑑三』日本基督教団出版局、1962、275-6 ページ。

傾向として人間の次元と神の次元とを区別する二元論的なあり方があり、そのため、人間の問題である政治や国家の問題を次元の低い（神の次元と比較して）問題としてしまい、教会と信仰とは社会と無関係であるかのような態度が生じることになってしまったと考えているようである。その結果、日本キリスト教は国策に取り込まれることになったと土肥は主張している。事実、少なくとも内村において、神の統治ではなく人間による人間の統治である点においてデモクラシーも帝国主義も変わらない、といたいささか乱暴な発想があることは確かである。<sup>3</sup> 内村自身は第二次世界大戦開戦前に死去しているが、無教会主義キリスト教の流れにおいても戦争を肯定する言説があったことは明らかであり、戦後になって、戦前・戦中の思想や態度について批判的検討がなされてきた経緯があるのである。<sup>4</sup>

しかし、内村の二元論的な思考法から、土肥が「歴史の動向への挑戦」と評した姿勢が導かれることも確かであろう。そこで本稿では、内村の二元論的思考を積極的に捉え直し、社会に対して無関心・無責任になるのでも、取り込まれ利用されてしまうのでもなく、社会と並走し続ける強靱な思想をそこから導き出す可能性をさぐってみたい。

具体的には、内村鑑三における二元論的思考<sup>5</sup>と彼のキリスト教理解との関連を確認するため、内村が聖書における多層性をいかにとらえているか、という問題を内村の聖書解釈テキストに即して分析する。聖書はそれ自体、一つの書物でありながら、多層的・多声的要素をもつものである。内村による聖書読解を通して、総合的・統合的であることに対しての内村の見解を確認すると同時に、「神のこと」を「人が記した」書、という聖書自体の二元論性についての内村の理解を明らかにすることを試みたい。

## 1 内村自身の「二元論」理解

### 1-1 内村による「二元論」という表現

そもそも内村自身にとって、「二元論」という言葉にはいかなる意味があったのであろうか。土肥は二元論的に区別しようとする思考法が「それはそれ、これはこれ」

---

3 1919年の「聯盟と暗黒」では、「人の政治たるの点に於ては米国の民本主義（ドイツ）も独逸の帝国主義も何の異なる所はない」と述べている（内村「聯盟と暗黒」、『全集24』、554ページ）。

4 第二次世界大戦に対する無教会主義キリスト者の態度・言動については、藤田若雄編著『内村鑑三を継承した人々（上）敗戦の神義論』（木鐸社、1977）『同（下）十五年戦争と無教会二代目』（木鐸社、1977）に詳しい。

5 原島正は『『と』の神学』再考—内村鑑三の宗教思想を中心に—（『基督教学研究第31号』京都大学基督教学会、2011）において、「と」という助詞に注目して分析しており、内村の思想を理解する上で重要な観点を示すものとなっている。

という無責任性を導き出すと考えたようであるが、内村自身は二元論あるいは二元論的ということはどう捉えていたのであろうか。

そこで、DVD 版『内村鑑三全集』<sup>6</sup>で検索した結果、「二元論」という表現を 7 つのテキストのうちに、計 9 件発見することができた。以下の通りである。

「西洋文明の心髄」1895『全集 3』211 ページ 「善悪二元論」

「吾人の希望の土台 葉山夏期学校に於て」1898『全集 6』73 ページ

「二元論を唱へ、善悪二神の存在するありて…」

『約百記 第三章 辞解』1904『全集 12』291 ページ

(「約百記」3:5 の辞解として)「当時の科学思想たる二元論」

「完全なる救」1918『全集 24』76 ページ

「宇宙は物と心とである、理想としては一元論であるが実際としては二元論である」

「モーセの十誡」1919『全集 25』151 ページ

「哲学も亦<sup>〔また〕</sup>多元論より二元論に進み更に一元論に帰着して漸く満足するに至つたのである」<sup>〔ようや〕</sup>

「日記 1925 年 5 月 2 日」1925『全集 34』435 ページ

「人生は一元論に非ずして二元論である。物質的世界と心霊的世界とは全く別の世界である。」

「二元論の基督教」1929『全集 32』108-110 ページ

「○若し私の信ずる基督教に哲学的基礎があるとすれば其れは二元論であつて一元論でない。」「二元論は人が人の有する能力に限りあるを自覚する時に懐く彼の万物の見方である。」「○二元論に対して一元論は万物を完全に説明する乎と云ふに決して爾<sup>〔そ〕</sup>うでない。」

ここで、これらのテキストを細かく分析することはしないが、これらの例には大きく分けて善悪二元論（ゾロアスター教のような）を指す文脈と、物心二元論を指す文脈とがあることをここでは指摘しておきたい。

前者について、1898 年「吾人の希望の土台 葉山夏期学校に於て」では、ゾロアスター教を指すと思われる善悪二元論に触れたうえで、「余輩の有する神の観念」では、「善の力が終に悪の力に打勝ち、不義が正義の足下に屈服」<sup>7</sup>する、と述べている。つまり、内村の神観においては、一元論なのである。1919 年の「モーセの十誡」の中でも、「…エホバの外何者をも神とすべからず、彼のみが宇宙に於ける唯一の眞の

6 内村鑑三全集 DVD 版出版会、2009。岩波書店版の『内村鑑三全集』2001 二刷版が収録されている。

7 内村鑑三「吾人の希望の土台」『内村鑑三全集 6』、73 ページ。

神なり」と叫びし時イスラエルは実に一躍して大思想に接したのである、我等を支配する神は唯一なりと言ふ、是れ思想の根本的統一である」<sup>8</sup>、と記しており、さらに「唯一の神エホバを信ずるは唯に信仰の根本なるのみならず又知識の根底である」<sup>9</sup>とも述べている。このように内村において、神が一であることと、人間の世界が二元論的であることとは、矛盾しない問題として捉えられているように思われる。むしろ、物質・人類の多様性・分裂状態を超え、調和を与えうるものとして神の一が考えられているのである。

一方後者の物心二元論という表現については、再臨運動期以降に用いられるようになる。たとえば1918年の「完全なる救」では、次のように述べている。

宇宙は物と心とである、理想としては一元論であるが実際としては二元論である、…人は体と霊とである、…体と霊と二つながら救はれて彼は完全に救はるゝのである、信者は聖霊に由て此世に在りて其霊を救はれ、再来のキリストに由て、来世に於て其体からだを救はる、斯くして霊と体と二つながら救はれて彼は完全に救はるゝのである、…<sup>10</sup>

再臨運動を通して、内村は復活に関する理解が変わり、心、霊だけが救われるのでは本当の救いではなく、身体も含めての本当の復活があるということを実感するようになったと述べている。内村の物心二元論は、二元論ではあるが、物質・身体を切り捨てる、というグノーシス主義的なものではなく、物心双方の救いを想定するものである。

1929年の「私の基督教 其三 二元論の基督教」の中でも内村は、「霊なる神が物質的宇宙を造り給へり」と聖書の宇宙観が二元的であることを主張し、「人には肉体の外に靈魂がある、そして神の霊(氣息と云ふは是れである)人の霊に臨んで之に聡明を与ふ」として人間のあり方が二元論的であることを記している。そしてその二元論の解決は、「信仰に由りて知る」ものであり、「今世に於ては信仰に由つて少しく推測せらるゝに止まり、来世を待つて明示せらるゝのであらう」から、「今は二元説の奥底に完全なる調和の在るを信じて進む。然り信じて進む」<sup>(かお) あは</sup>ののだ、と述べる。またここでは聖書の典拠として第一コリントの言葉「彼の時には面を對せて相見ん」が引用されている。<sup>11</sup>

8 内村「モーセの十誡」『全集 25』、150 ページ。

9 同、151 ページ。

10 内村「完全なる救」『全集 24』、76 ページ。

11 この段落における内村の引用は、すべて「私の基督教 其三 二元論の基督教」『全集 32』、108-111 ページより。

従って、内村にとって二元論とは、「人が人の有する能力に限りあるを自覚する時に懐く彼の万物の見方」<sup>12</sup>である、ということになる。ただし、その解決のために安直な一元論を唱えることについて、「一元論に物を霊に引上げるの利があると云ふならば、同時に又霊を物に引下ぐるの害ある」「一元論実は汎神説は常に此害を醸した」<sup>13</sup>、と内村は注意を促している。

他に、日記においても二元論に言及し、「人生は一元論に非ずして二元論である。物質的世界と心霊的世界とは全く別の世界である。そして基督信者は其行為の法則として天然の法則に依らずして霊の法則なる神の聖旨に従はねばならぬ」<sup>14</sup>と記している。

## 1-2 二元論に類する用語の用いられ方

### 二元説

続いて、「二元論」と関連する用語の、内村における用いられ方についても確認しておきたい。まず「二元説」である。

先に見た「私の基督教 其三 二元論の基督教」において、二元論と同時に二元説という表現を用いており、内村がこの二つをほぼ同じ意味で用いていることがわかる。1929年の「楕円形の話」のなかでも、二元説という言葉が再び用いられている。この文章は、真理が二中心をもつ楕円形である、と言えば、それは二元説であり不完全な思想だと反論されるであろう、と前置きをしたうえで、人生の苦しみは思想の満足と事実の満足との矛盾にある、と主張する内容となっている。<sup>15</sup>

### 二元的

ヤコブ書を解釈する1904年の「信仰と行ひ」<sup>16</sup>において、内村は信仰と行いとの関係を「二元的」と表現している。また1905年の「約百記註解」では、ヨブの自己分裂的状况を「二元的」と表現し、ヨブはそのような自己を嫌う、と記している。<sup>17</sup>これは上述の、霊と肉の二元論、「二重人格」の問題へつながる理解である。また前述の「楕円形の話」においても、「二元論的」であることを「二元的」と記した部分がある。

### 二元性

1907年、父の死に際して記した「理と情」で、「理あり、情あり、情は理を打消<sup>うちけ</sup>す能はず、理は情に勝つ能はず、理は永生を信じて動かず、情は永別を惜んで泣く…人

12 前出「私の基督教 其三 二元論の基督教」、109-110 ページ。

13 同、110 ページ。

14 内村「日記 1925年5月2日(土)」、『全集34』435 ページ。

15 内村「楕円形の話」、『全集32』、210-212 ページ。

16 内村「信仰と行ひ」、『全集12』438-443 ページ。

17 内村「約百記註解」、『全集13』45 ページ。

の二元性は最も著しく死に際会して顕はるゝが如し<sup>いちぶる</sup>」<sup>18</sup>と記している。ここでの二元性は情と理との二元性であるが、内村は「我は人なり、天使に非ず、我は地の産なり、故に涙の子なり」「ア、神よ地を救ひ給へ、我は地を離れたる天を望まず」「天と地との合せし所、嗚呼、我は彼所<sup>かしこ</sup>に我が父と再び相会せんと欲す」<sup>19</sup>と述べて、自らが「地に属する」情的な「涙の子」であることを否定してはいない。父の死を悲しんでいることを、率直に表しているのである。

続いて本稿では、聖書において示される霊と肉の二元論、人間の二元論について、内村による聖書解釈テキストを通して確認することとする。

## 2 聖書における二元論（神の事と人の事）

### 2-1 聖書の多層性

内村は聖書について、その多層性を捉えたうえで、さらにその多なるものが一つの聖書とされていることの両方に留意するべきだと述べている。これについて、聖書全体と、特に福音書についてとの双方から確認しておきたい。

#### Ex1 聖書全体の多様性、多層性

1900年の「聖書の話」において内村は、「聖書は書集でありまして一書ではありません」と明記している。そしてその多様性のために一見「厳しい書<sup>いかめ</sup>」のようであるが、「然し是を繙<sup>ひもと</sup>て見ると実に解し易い睦み易い書<sup>したし</sup>」と述べるのである。ただし、「解し易い」「面白い」と感じるためには、聖書が「示さんとする真意に達する」必要がある。そのために内村は「之を先づ一二度通読すること」をすすめて、聖書には「殆んど読むに堪えないほど乾燥無味」な部分もあるが、それらは「我々の棲息する此地球」に、「松島」「天の橋立」だけでなく「サハラの砂漠があり、シベリヤの曠野がある故にライン河の沿岸もダニューブの沃野も一層其の美を増す」ようなもので、聖書の美は「其全軀に在」るのだ、と主張している。従って「旧約に於て正義の刃に接しない人は新約に於て恩恵の雨に浴するも其楽しさを感じない人」なのであり、「靈魂の救ひは聖書全体の研究を要」するのである。<sup>20</sup> 多様性を含む全体をひとつの美として示すのが聖書の美である、ということになる。

18 内村「理と情」、『全集15』60ページ。

19 同前。

20 この段落における内村の引用は、すべて「聖書の話」、『全集8』292-300ページより。なお、「読むに堪えないほど無味乾燥」な部分として挙げられているのは「列王紀略、歴代志略、以西結書<sup>エゼキエル</sup>の或る部分」である。

## Ex2 四福音書の多層性

1907 年の「福音書の研究」において内村は、「<sup>(マタイ)</sup>馬太伝は馬太伝として研究せよ、<sup>(マルコ)</sup>馬可伝は馬可伝として研究せよ、<sup>(ルカ)</sup>路加伝は路加伝として研究せよ、<sup>(ヨハネ)</sup>約伝は約翰伝として研究せよ、<sup>(シ)</sup>強ひて四福音書の記事的調和を計らんと努むる勿れ」<sup>21</sup>と記す。それぞれの福音書には、それぞれの「信徒の心にキリストを<sup>かたちづく</sup>形成らんとする」目的があるからである。

また 1920 年の「新約聖書大観 第一回 四福音書」では、「イエスの伝が四種あるは亦大に考ふべきこと」であり、「四を要せず全きもの一を要す」と考えたくなるかもしれないが、「一を以て<sup>(まつた)</sup>完きを望むことは出来ない」ため、イエスの「言行を伝ふるもの四ありて各彼の一方面を伝へ、この四を合せて一の完全を現はす」のである、とする。すなわち、「[四福音書ありてイエスは<sup>ユダ</sup>猶太的、<sup>ローマ</sup>羅馬的、<sup>ギリシャ</sup>希臘的、人類的の四方面より描かれて完全に描かれた」のである。様々な面から描写することにより、よりイエスの姿が鮮やかに描き出される、ということになるであろう。<sup>22</sup>

内村によれば、聖書は「神の聖旨を人の手を以て写したるもの」(「聖書の話」<sup>23</sup>)、「神の事を人が伝へた書」(「宗教座談」<sup>24</sup>)である。神が無限・全知全能とされるのに対して、書き手である人間は限界をもつ存在であって、言葉で表現すること、あるいはそれを知的能力により理解することにもまた限界がある。よって、「神の聖旨」を、内村がそうしたように、読者に実験(実感)してもらうしかないのである。では、そこで何を実験するのか。それは、内村の理解では、神の救済、すなわち一人ひとりの人間が、罪なる人間のままでありながら、十字架につけられて死んだイエスの贖罪により、神の愛に受け入れられていること、である。そして、この罪からの救済という点にこそ、人間の二元論的な性質に対する解決、調和があると内村は考えているのである。その実験・実感の仕方に関して、読み手における、ユダヤ、ギリシャといった文化的背景による差異があるとすれば、福音書が多層的な作りになっていることは読み手それぞれが自分の経験として実感するために有意義であるということにもなるであろう。

以上より、内村が「二元」的な表現を用いる際、多くの場合問題とされているのは霊と肉の二元論であることが明白となった。また、そこにおいて内村が二元的である

21 内村「福音書の研究」、『全集 14』466 ページ。

22 この段落における内村の引用は、すべて「新約聖書大観 第一回 四福音書」、『全集 25』528-530 ページより。

23 前出「聖書の話」、291 ページ。

24 内村『宗教座談』、『全集 8』137 ページ。

ことを人間の事実、根源的な状況として捉えており、二元的であること事体を必ずしも否定的に捉えてはいないことが明らかになったと言えるだろう。ただし、ここでの否定的ではない、という意味は、否定しても仕方のない事実である、という意味であり、二元的であることが克服されるべき事態として捉えられていないということではない。しかし、その克服は人間の努力によってではなく、神においてなされることと内村は考えているのである。続いてはこの問題について、救済という観点から確認してみたい。

### 3 救済の二元論、罪人にして義人

#### 3-1 救われるべき人間の、そもそもの悲劇としての二重人格

キリスト教の世界観における人間は、神に似せて創造されたものでありながら、神に背くものである。その意味で人間は樂園を追放されて以降ずっと二元論的である。しかし内村によれば、人間は樂園を追放された瞬間から、神との関係を取り戻すことを切望し続けているのである。<sup>25</sup> そのためには、人間の自然性、肉の部分としての罪、自己中心・人間中心と、神に似せられた部分としての霊あるいは良心との調和が必要となる。この人間における霊と肉との二元論、二重性は、内村において時に「二重人格」<sup>26</sup> と呼ばれることもある。

しかし、この「二重人格」であることが、内村においてはその逆転的な発想により救済へ至る鍵となる。たとえば、「接木」という考え方がそうである。二元論・二重人格であり、異なる別々のものが二種類あるからこそ、それらを「接木」することが可能になるのである。

この接木という比喩は、日本（武士道）という台木にキリスト教を継ぐ、という意味で、キリスト教の土着を表したものと理解されることが多い。内村も1916年の「武士道と基督教」では「世界は畢竟<sup>つまり</sup>基督教に由て救はるゝのである、然かも武士道の上に接木<sup>つぎき</sup>されたる基督教に由て救はるゝのである」<sup>27</sup>とキリスト教と結びつけることにより武士道を再評価する意味でこの言葉を用いている。しかし、霊と肉の二元論、二重人格の調和としての接木としては、1926年の「接木の理」での用いられ方に注意しなければならぬ。ここで内村は、「此場合に於て台木となるのは生れつきの罪

25 たとえば「三条の金線」において内村は人間の墮罪と樂園追放に関して、「信が人の心より失せて彼等は樂園より逐ひ払はれました、然し信の去りし後に愛と望とは入り来りました、人類は未だ全く失望すべきではありません、義罰の神は亦恩恵の神であります、神は人類を罰し給ふと同時に救済の途を約束し給ひました」と述べている（全集11、233ページ）。

26 たとえば内村「羅馬書の研究 第三十三講 潔めらるゝ事（六）パウロの二重人格」（『全集26』、272-7ページ）等。

27 前出「武士道と基督教」、162ページ。



の人である、そして之に接がるゝのが神の子キリストである。そして之に実るのが罪の人の悪しき果に非ずして、神の子の善き果である]<sup>28</sup> という表現で、罪深い人間になぜ善いことができるのか、ということの説明している。農業における接木というのは、実で判断すべきものである。重要なのは、いかなる果実ができるか、なのである。よい果実がなるのであれば、台木が何であっても構わない。そして、この場合の台木は、内村においては「悪しき樹」「罪に生まれし人」と理解されている。しかしこの台木に意味がないわけではないのである。内村は「信者の肉は台木の根と同じく全然死んだのではない、まだ生きて彼に内在し給ふキリストの靈に生命の液汁を供給しつゝある」<sup>29</sup> と述べている。靈に対する肉に、意味や役割がないわけではない。台木はその「悪」「罪」を克服し、かつ継がれた枝へと生き生きとしたエネルギーを送ることができるようになるのである。

では、どのように靈が肉に「接がれる」のであろうか。そこに二元論が、相互に無関係な単なる並列で終わらないための鍵があるのではないだろうか。続いてはその問題を考えてみたい。

### 3-2 二元論の基督教、二元性の調和

内村は先に挙げた「楕円形の話」で、楕円の二中心として表現された二元論を「義と愛」の二元論とし、これらの「対照に就いて見ん乎、真剣に生涯を送らんと欲する者は何人も其調和に苦しまざるを得ない」<sup>30</sup> と述べている。言うまでもなく、愛は赦そうとするはたらきであり、義は罪を罪として厳しく見逃さないはたらきである。そしてパウロがロマ書で言うように人間の罪が靈と肉の分裂状態（二重人格）によるのであるとすれば、これは靈と肉の二元論の調和の問題でもあるのである。

内村は、「基督信者の場合に於て、彼は義と愛との調和をキリストの十字架に於て認むる」<sup>31</sup> と述べ、「義の神が如何にして罪人を罰せずして赦さん乎とは神御自身に取り至難の問題」<sup>32</sup> であり、「神は此問題をキリストの十字架を以つて美事に解決し給うた」<sup>33</sup> と説明する。「即ちイエスに於て神の憐憫（慈愛）と真実（公義に基ける審判の精神）とが合体したのである、義と平和とが互に接吻したのである」<sup>34</sup>。

しかし、「調和は実験的であつて思想的でない。思想的にはキリストは依然として

28 内村「接木の理」、『全集 29』415 ページ。

29 同、418 ページ。

30 内村「楕円形の話」、『全集 32』210 ページ。

31 同前。

32 同前。

33 同前。

34 同前。

「<sup>(つまず)</sup>躓きの石」である」<sup>35</sup>と内村は続ける。

信者は十字架の救を実験するのであつて、解得したのではない。彼は実験を以つて理論を超越したのである。…我等は理解らざるに理解らんと欲し、苦戦奮闘して終りに人生の実験に解決以上の解決を得るのである。即ち真理は実得すべき者であつて理解し得べき者でない。其れ故に貴いのである。<sup>36</sup>

実は、内村が「楕円」というレトリックを用いて、愛と義の問題について説明したのはこの「楕円形の話」が初めてではない。たとえば1916年の「神の忿怒と贖罪」においても、ほぼ同じ説明の仕方がされている。

この「神の忿怒と贖罪」で内村は、神は一元的ではなく、愛でありまた義である、と主張している。「聖書は神は愛なりと教ふ (God is love.) 然れども神は愛のみなり (God is the love.) とは教へない、神は愛である又義である、人に情と理とのあるが如く聖書の示す神に愛と義とがあるのである、而して如何にして二者を調和せん乎、是れが大問題であるのである」<sup>37</sup>。そしてその「大問題」の解決として、「<sup>(か)</sup>義に由て愛を現はさんが為」、「即ち罪人を義としながら尚ほ御自身義たらんが為めにはキリストの十字架を除いて他に途は絶対に無い」<sup>38</sup>「キリストの十字架は聖なる神と罪なる人との会合所である」<sup>39</sup>と述べるのである。

「神の忿怒と贖罪」というテキストは、藤井武による「単純なる福音」への反論として記されたものである。藤井はそこで「キリストの十字架が我等を救ふは彼が人類を代表して罪の罰を受け給ひしが故ではない、彼処に我等は自己の罪と其よりも深き神の愛とを発見したるが故である」<sup>40</sup>と述べ、「十字架に顕れし神の愛我等の罪を滅ぼせり」<sup>41</sup>というのがパウロの贖罪論であると主張した。いわば、代罰なしで救われる贖罪論である。ここにおける神は、「窮なく深き純愛の神」<sup>42</sup>である。それに対して内村は、「神は愛のみではない」と応答し、愛と義の両方（二元的）を神の性質として挙げたのである。藤井の神観を一元論的、内村の神観を二元論的と言ってもよいであろう。

後に藤井は、「単純なる福音」を記した当時の自らについて、「私は未だ自分の罪のほんたうの恐ろしさを覺らなかつた。…それ故に十字架は私にとつて無くてならぬも

35 同、211 ページ。

36 同前。

37 内村「神の忿怒と贖罪」、『全集 22』242 ページ。

38 同、243 ページ。

39 同、244 ページ。

40 藤井武「単純なる福音」、『藤井武全集第九巻』（岩波書店、1971）414 ページ。

41 同前。

42 同、415 ページ。

のではなかつた」[私はいはゆる罪の贖いを嫌うた。キリストの宥<sup>なだ</sup>めによつて神の怒は和いだなどといふは私に堪へがたき不快な音づれであつた。私はもつと明るく十字架を見たかつた]<sup>43</sup>と述べた。興味深いことに藤井は、そのような自分のあり方を「近代人の片割れとして、永らく罪の贖ひを信ずることができずにゐた」<sup>44</sup>と記している。では、この「近代人」とはいかなる意味合いなのであろうか。

残念ながら藤井自身はここで「近代」性について説明してはいない。一方、内村において「近代人」は、しばしば批判的に用いられる言葉である。内村に於いて、近代的であることは、人間中心的で、論理的であること（論理で理解しようとする）をあらわす。<sup>45</sup>しかし同時に人間は、いつも理性的であるわけではない、根本的な自己中心性を抱えているものでもある。人間の側からの一元論的な合理化は、内村においては神に対して人間の理屈を優先させることであり、神を後回しにすること、すなわち「罪」になる。そこで内村は、「神の忿怒と贖罪」において「十字架と言ひて、神の人の對するすべてと、人の神に對するすべてが言ひ表さるゝ」<sup>46</sup>と記したのである。神と、人間とが異なる以上、二元論的であることはどうしても避けられない。しかし異なるものであっても、（あるいは異なるものであるからこそ）相互の関係性をもつことができるのである。その関係性を与えるのが、人であり神である、神であり人であるキリストと、その十字架での死であり、そして復活なのである。

## まとめに代えて

前述した「二元論の基督教」で内村は、霊と物質（肉）の二元論について述べていた。ただしそこで、霊的であることと物質的であることが、同じレベルで相反するというように理解されているのではない。内村は「神（霊）が天地（物質）をつくつた」と述べている<sup>47</sup>からである。神が世界に関わるように、霊は肉と関わる。なお、人間による言説（思想）も含めて、物の側においていることは、人間における限界の自覚へとつながる。つまり、霊と肉の接点やその調和については、知的・論理的にアウフヘーベンされ理解されるといったことではなく、超越的な体験（神秘体験ではなく、信仰経験のなかで自分なりに腑に落ちる、ということ）を通して受動的に理解される、ということになるのではないだろうか。たとえば、内村が矢内原忠雄から、キ

43 藤井「憶内村鑑三先生 三 先生と私」、『藤井武全集第十巻』（岩波書店、1972）129 ページ。

44 同、132 ページ。

45 たとえば1914年の「近代人」（『全集20』239-240 ページ）、1920年の「近代人の聖書観」（『全集25』584-585 ページ）、1925年の「近代人と神」（『全集29』7-8 ページ）、1926年の「知識と信仰」（『全集29』461 ページ）等に、このような「近代人」観が示されている。

46 前出「神の忿怒と贖罪」、245 ページ。

47 前出「私の私の基督教 其三 二元論の基督教」、108 ページ。

リストを知らず死んだ者の救いについて問われた時の答えだという、「僕にも解らんよ。…併し此の爲めに君自身の信仰を止めてはいけない。斯かる問題は長い信仰生涯を続けて行く間に自然にわかって行くものだ」<sup>48</sup>という言葉はそれを示したものであると思われる。

異なるがゆえに二元的であるものどうしを一元的にまとめようとするれば、そこに内村の言うような「一元論に物を靈に引上げるの利があると云ふならば、同時に又靈を物に引下ぐるの害あることを忘れてはならない」「靈と物とは一であると言ふ者は大抵善と悪とは一なりと言ふ」<sup>49</sup>といった問題が生ずることもあり得る。何が善で何が悪なのか、という問題をここで簡単に論じることにはできないが、「善は善、悪は悪、東の西より遠かるが如くに、善と悪との間に無限的距離あり」<sup>50</sup>と「二元説」的に捉えることにより、内村の発想が理想としての善をあきらめない態度へとつながるといふ側面もあるのではないだろうか。ということは、土肥が「無縁」とした内村の「はげしい意識」「情熱的表現」と「二元論的思考法」<sup>51</sup>とが、この「あきらめない」という点において、つながっているとも考えられるのである。少なくとも内村の「はげしさ」「情熱」が、「肉」の存在である人間の、「靈」にあこがれ、求めるはげしさと相通じるものであることは確かであるだろう。

なお、完全なる救済への一部としての、神化あるいは聖化の問題が内村の二元論的キリスト教理解においてどのように扱われているか、ということは今後の課題である。救済の完成は、終末的なできごとと考えられるが、それでは人間から神への方向性において、罪深い人間でありながらその信仰が深まる、といったことはどのように理解されるのであろうか。固定的であることを嫌い、変化し続けるところに生命力を見出していた内村にとって、その変化にもまた肉・物の側に属する人間としての、限界があるということになるのであろうか。ひきつづき考えていきたい。

---

48 矢内原忠雄「私は如何にして基督信者となつたか」『矢内原忠雄全集第二六巻』（岩波書店、1965）143 ページ。

49 前出「私の私の基督教 其三 二元論の基督教」、110 ページ。

50 同、111 ページ。

51 土肥前出書、276 ページ。